

110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(10)

講題：石川啄木の文学と東アジアの動向

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 10 回は、太田登天理大学名誉教授による「石川啄木の文学と東アジアの動向」で、初のオンライン講義となった。教授は 2002 年から 1 年間本学日文系で交換教授として勤め、その当時は SARS に見まわれ、今回は新型コロナの影響で台湾訪問ができなかった、といった話から講義を始めた。

1. 石川啄木 (1886・2・20 生～1912・4・13 歿) という詩人はどういう「存在」なのか

太田教授はまず啄木の生い立ちと作品を紹介してくれた。歴史家鹿野政直によると、1901 年に死去した二人の思想家福沢諭吉と中江兆民の死は、日清戦争から日露戦争にいたる近代日本の「帝国」としての光と影を象徴するという。そして、この二人が取り組んだ国民的国家的課題を自らの問題とし、20 世紀の幕開けである 10 年間に懸命に生きた文学者が啄木である、と太田教授は述べた。

2. 啄木は日清戦争 (1894・8～1895・4) をどのようにとらえていたか

日清戦争は啄木がまだ 10 歳になる前に起きた。「空中書」(『岩手日報』1908 年 10 月 16 日) で、啄木は次のようなことを書いた。日本は清国とロシアという二大国に勝利し、両国を侮る気持ちになっているが、それは「浅慮短見」である。なぜなら、中国には「哥老会」のような組織があり、将来を見据えて、人材の育成に取り組んでいるからである。また「百回通信」(同紙 1909 年 10 月 9 日) では、清朝政府の高官で儒家の張之洞の死を追悼し、彼がいち早く多くの人材を日本留学に派遣したことを讃えた。教授の考察では、日露戦争後の中国人留学生の増加を踏まえ、啄木の意識には未来像が描かれていた、という。

3. 啄木は日露戦争 (1904・2～1905・9) をどのようにとらえていたか

啄木は日露開戦後間もなく「戦雲余録」(同紙 1904 年 3 月 12、19 日) を著した。ロシアは敵国であるが、啄木には憐れむべき国でもあった。なぜなら大多数の国民が帝政の圧政に苦しめられているからである。そこで戦争終結によって東洋、さらに世界が平和になり、ロシア国民も解放されることを願った。またロシア本国でトルストイやゴーリキーの小説も発売中止となった事態を受け、

言論の自由が損なわれることを嘆いた。それゆえ啄木は敵将であるマカロフ中将の死へも詩を捧げた。「マカロフ提督追悼」と題された長い詩によって、啄木は敵国のすぐれた英雄を詩の中に永遠に留めおこうとしたのである。

4. 啄木は韓国併合（1910・8）をどのようにとらえていたか

桂太郎内閣が布告した「戊申詔書」（1908年10月13日）は、明治維新以来の天皇中心の国体思想をあらためて強化することを目的とした。1909年3月に啄木は東京朝日新聞社に入社するが、まもなく「新聞紙法」の公布があり、検閲制度の強化という事態に直面した。言論統制の厳罰化は韓国併合を準備するものだった。1909年10月26日韓国統監府初代統監である伊藤博文が安重根によって暗殺される。啄木は「百回通信」の「十六伊藤公の訃」（同紙1909年10月27日）で、二つの歴史認識を示している。日本のために伊藤の死を悼むことと韓国人の心情を理解することである。太田教授の考えでは、啄木にはナショナルなものインターナショナルなものが交差する複眼的な視点があり、それによって当時として極めてまれな客観的相対的視点にもとづく歴史認識を持つことができた。

5. 啄木は辛亥革命（1911・10）をどのようにとらえていたか

啄木は1911年10月10日に起きた中国革命同盟会の蜂起に強い関心を持った。辛亥革命に対する啄木の認識は、日露戦争後留学生を日本へ送り込んだ政治状況を客観的に分析した歴史観によって導かれたものであろう、と太田教授は述べる。そして民衆による中国の変革を目の当たりにして、啄木は日本の体制改革のための具体案を模索したという。

6. 啄木は東アジアでどのように受容されてきたか

啄木没後、短歌集や詩集が刊行された。それらは社会問題の根源である「貧乏」を捉え、民衆の応援歌として広く受け入れられていった。中国でも周作人に愛誦、翻訳され、1920年代の中国の新詩革命に大きな影響をあたえた。台湾では林丕雄（淡江大学名誉教授）、林水福（台湾国際啄木学会理事長）、高淑玲（景文科技大学副教授）、劉怡臻（明治大学後期博士課程）らによる研究と翻訳がある。

(Web サイト: <https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿: 塚本善也・日文系副教授)